



ロンドン五輪に見る日本の対応力



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

ロンドン五輪をかなり長時間、テレビで見た。日本ではNHKなどがほぼ丸一日競技の模様を放映するため、ついつい見てしまったのだが、テレビが放映するのは基本的に日本選手の出場競技が中心で、かつメダルにあまりにもフォーカスし過ぎるきらいがある、と感じた。

今回の五輪では、日本のお家芸と言われてきた柔道で、男子が史上初めて金メダルゼロに終わった。女子も金メダルが有力と言われていた軽量級二つでメダルを逃している。現在の柔道は日本の目指す伝統的なそれではなく、ローマ字の「JUDO」だ、と言われて久しいが、日本の柔道界はその現実を認識しながらも、それに対して「抜本的な対応を怠った」と言われても仕方がないであろう。

そもそも日本が目指す、きちんと相手と組んで「一本」を取る美しい柔道は、現在の「JUDO」ではほとんど見られない。それは、「技術は世界一」と言いながら、売り上げが伸びせずに苦しんでいる日本企業の姿に酷似している。日本の柔道選手が切れるのある技を出す前に負けているのに対して、欧州勢の「JUDO」を見てみると、改正されたルールを最大限生かして、競技に取り組んでいるようだ。韓国勢も、世界で展開している同国の企業活動と同様、強力な政府の後押しを背景に、ルールの隙間を徹底的に研究し、「JUDO」の強豪国に割って入ろうとしている。日韓対決では決して強いと思えない韓国選手が、さまざまな手法を駆使して日本選手に肉薄する姿は、現在の産業界の構図その

ものに見える。そうは言っても、柔道がこれだけ国際的に広がっている実態はむしろ、われわれにとつて喜ぶべきことかもしれない。日本も五輪でメダルを取る「JUDO」と日本の神髄を体現した柔道をはつきり分けて取り組むべき時期が来たのではないだろうか。それは、日本企業にも共通の課題と思われ。

そういう意味で、もう一つのお家芸の体操男子で個人総合の金メダルを獲得した内村航平選手は、ずば抜けた存在である。難度の高い技が重視される中、その技の姿勢や美しさを追求する内村選手は日本の「匠」を彷彿とさせる。

中国の男子体操チームは、内村選手にはかなわないことを承知してか、団体と種目別の金メダルに懸けてきた。6種目を満遍なくこなせる選手ではなく、各種目のスペシャリストをそろえ、見事に男子団体総合でメダルを獲得した。だが、団体チームから個人総合決勝に進んだ選手は一人もいないという前代未聞の事態にもなった。ここでは、分業制・スペシャリストの中国、全てを美しくこなすことを目指す日本、という構図が浮かぶ。

果たしてどの戦略が正しいのだろうか。戦略と言えば、バドミントン女子で中国ペアなどが無気力試合を理由に失格を言い渡され、結果的に日本ペアに銀メダルが転がり込んできた。戦略ばかりにこだわると、ルールの罠に落ちるといふことをわれわれに見せてくれたようだが、日本企業も原点に立ち返って、他国の状況を把握すべきかもしれない。